



Kingdom後面の内部。キャビネットのほぼ中央に30cmユニットが搭載されており、トウィーターはイコライザーユニットの中心部分に上向きに装着されている



Kingdomを正面から見たところ。箱の上部のキャビネットとサブ天版の隙間に円盤形のイコライザーが見える。箱の材質は響きの良い米マツ合板で構成されており、足も木製である

# Retro-Future

古くて新しい もうひとつのヴィンテージオーディオ

ヴィンテージといえば、アルテックやタンノイなどが誌面に取り上げられる機会が多い。しかし、当時これらの老舗と肩を並べる、他の多くのブランドがあったことを知る人は少ないだろう。ビンテージ・ショップ「アトリエJe-tee」では、音質はもちろん、デザインにもこだわった「もうひとつのヴィンテージ」を数多く紹介している。本企画では、同店で販売されている製品を中心に、毎号テーマとなるブランドを取り上げている。今回はドイツ、LORENZ (ロレンツ) 社のスピーカーシステム「Kingdom」を紹介しよう。

## 第36回 LORENZ

ドイツの音響機器メーカーで、真空管やアンプ、スピーカー、ラジオを戦前から生産していた。50年代になって正式に社名を LORENZ とし、北米や英国の市場にかなりの数が輸出されていた。有名なのは英国 Parmeco 社製 38cm コアキシャルユニットを搭載した BBC LS-1 モニタースピーカー。ここに同社のトウィーター LPH-65が搭載されている。

本文 / 田中伊佐  
製品解説 / 岡田圭司 (アトリエJe-tee代表)  
撮影 / 小林幹彦 (彩虹舎)



## Kingdom

1950年代の後期に北米市場を目的として開発されたモデルで、4本足の密閉型キャビネットに30cm ユニットと円盤形のイコライザーを使ったトウィーターを搭載した2ウェイシステム。ネットワークは使わず、トウィーターのみをコンデンサーでカットして、ウーファーとパラレル駆動させている。トウィーターの円盤形のイコライザーは360度方向をカバーしているため、小柄ながら広がりのある空間演出がとて自然で、上質なサウンドが聴けるシステムである。

# Retro-Future

古くて新しい もうひとつのビンテージオーディオ

# LORENZ



「LP-312 woofer」。フルレンジに近い30cm口径の同社の主力ユニットで、LPH-65トウィーターを搭載した同軸型ユニットにも同じタイプが採用されている。紙のシングルコーンでエッジ部分のサスペンションが3段になっていて、豊かな低音再生を可能にしている。初期型と後期型があり、このシステムにはセンターにサブコーンを搭載した後期タイプが採用されている



ウーファーコーンに社名の LORENZ のロゴマーク



「Omni Directional tweeter」。湾曲した2枚の金属製の円盤がイコライザーとして採用されている。中心部分にトウィーターユニットが上向きに装着。このダイアフラムはフェノリック製樹脂で形成されており、耳障りのやわらかい滑らかな音質を生み出している



## 部屋の空気に音が馴染んで ホールの情景が浮かび出す

いつものようにアトリエ Je-tee に入ると、すでにクラシックのピアノ音が流れている。音量は小さいが、部屋の隅々にまで行き届くような鳴り方だ。深窓の令嬢が隣りの部屋で弾いている。そんなふうにならなくても音は漂っている。

Omni Directional (無指向性) と書かれた単体ユニットを見ると、ハイハット・シンバルのような拡散プレートがあり、2枚の隙間から全方位に高音が出る仕組みになっている。これがエンクロージャーの上部に仕込まれていた。まったく関係ないが、これを見てホテルニューオータニの360度展望ビュッフェダイニングの外観が頭をよぎった。首都高から見上げるだけで、行ったことありませんけどね。

さて岡田さんはキングダムが苦手と見えるビートのきいた音楽を手始めに聞いていく。

最初のステイキング「フラジャイル」でトウィーターばかりに気を取られていたがフルレンジもかなりいけることを知る。ベースの反応が速い。単純に音場空間が広がる。最初、ハイハット・シンバルのような拡散プレートがあり、2枚の隙間から全方位に高音が出る仕組みになっている。これがエンクロージャーの上部に仕込まれていた。まったく関係ないが、これを見てホテルニューオータニの360度展望ビュッフェダイニングの外観が頭をよぎった。首都高から見上げるだけで、行ったことありませんけどね。

遊型スピーカーと決めつけるわけにはいかない。元ちとせ「ワダツミの木」の声もすっかり前に出てくる。よくオーディオの評価に言われる「口のサイズ」は、最先端機器のようにカチッと締まっていなくても、変に肥大していない。フワッと楽に聴かせるところが好ましい。

高音質録音のアラン・パーソン・プロジェクト「アイ・イン・ザ・スカイ」は近寄りたたいエッジのきいた録音だが、リスナーを包み込んでいく感じがする。実はここまでは、粗探し試聴といつていい。いよいよ本領を発揮するクラシックに移る。

リチャード・タニクリフの無伴奏チェロ。響きが深々としていて、これはもう気持ちいいとしかいいようがない。無指向トウィーターが、あたかも教会のようなたつぷりした空気感を醸し出す。ずっと続いてホールの情景が浮かんでくるようなモーターアルバートの交響曲もまた同じようによかった。

最後にかかったビル・エヴァンスのライヴは、ジャズクラブの前方ではなく、後ろのほうでゆったりと何かを飲みながら白熱の演奏を聴く雰囲気。大人の音。確かこの連載で8年前にもロレンツを聴いたことがあった。「部屋の空気を味方につけたようなスケール感や余韻」と書いたが、格調高いその味わいはまったく同じ傾向だと思った。